

# 聖徒の道



1960 5月号

末日聖徒イエス・キリスト教会



この故に

悔い改めて幼児のごとく

われに来る者は

われことごとく

これを受け容るべし

かかる者はすでに

神の王国に居るものと

同じなればなり

見よ

われはかれらのために

一度わが生命を捨てて

また生命を得たり

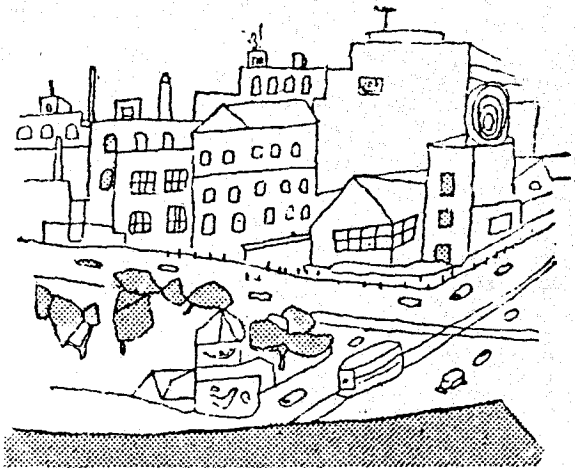
故に

世界の隅々に

至る者たちよ

悔改めをなし

われに來りて救いを受けよ



## 聖徒の道 1960年5月号

### 〔予言者のことば〕

汝の母を見よ……デビッド・O・マッケイ…(130)

### 〔伝道部長メッセージ〕

神権の働きなしには御教の真の理解はない

……ポール・C・アンドラス…(132)

### 「モルモンの教義」

「日の光榮、月の光榮、星の光榮」(12)

……佐藤竜猪…(136)

### 極東に於けるモルモン

私の改宗……梶山克広…(140)

私の改宗……横田光順…(141)

君達はパン種である……マシュー・カウレー(142)

### 母の日(5月8日)

私の母……柳田征史(143)

私の母……秋元絃江(145)

### 大会説教

真理を知れ……ヘンリー・D・モイル(147)

### 末日聖徒イエス・キリスト教会歴史(5)

ジョセフ・フィールドینگ・スミス……(152)

心の師……小林整功(156)

親しく語らん……中西昭世(157)

神権を受ける資格……ジョン・I・ウイヅソウ(156)

伝道本部だより……(159)



予言者のことは

## 汝の母を見よ

大管長 デビド・O・マッケイ

私たちが母親を褒めたたえるとき、私はキリストとその母のことを想い起す。キリストはその一生を通じて本当に母を敬いたもうた。またその母はキリストを可愛がってお育てになった。私たちはキリストの家庭生活についてあまり多くを知らないが、私たちはキリストの母がキリストを愛し、従順でなくてはならないこと、特に私たちの神である天父に対して従順でなくてはならないとお教えになったことを知っている。ユダヤ人の少年は、私たちが二十一才で丁年になるように十二才になると丁年になった。十二才の時、キリストは両親に連れられてエルサレムの神殿に上りたもうたが、その時一しょに行った人々が帰途についたあとに残って、神殿の中で祭司たちや教師たちや案内者たちにいろいろ聞いたり質問したりしておいでになったことをあなたたちは覚えているであろう。

キリストの父母であるマリヤとヨセフは、帰途についてから一日経ってその子の居ないことに気がついた。何処に居るかと思つてまたエルサレムへ帰つて見ると神殿の中に居たので驚いて、私たちは心配していたのだと言うとキリストは「何故われを尋ねたるか、われはわが父の家に居るべきを知らぬか」（ルカ伝二〇四十九）と仰せになった。キリストはこの時十二才であつてユダヤの

律法から見ても一人前の男子であつたが、この世の両親の言葉に従わなくてはいけないことを知つて両親と共に家路につきたもうた。

私たちはその後キリストの身邊について、キリストの母マリヤがキリストについて言われたすべての予言や起つた事などを心の中に大切におさめておいでになつたこと以外に實際何も知っていない。

それから後になつて、私たちはキリストがその母や弟子たちと共にガリラヤのカナの婚礼に臨みたまふたことを知つてゐる。母のマリヤは今は早や立派な一人前の男子になつたその息子と共に婚礼の席においでになつたが、その時「かれらに葡萄酒なし」とお言いになつた。マリヤはその息子を確く信じ、その息子が偉大な能力を有つてゐることを知つて「僕べどもに何にてもその命ずるごとくせよ」お言いになつた（ヨハネ伝二〇五）と聖書に誌してある。

私たちはそれからキリストがこの世の生涯を閉ぢたまふ最後の場面になるまで、その母に關係のあることをほとんど聞いてゐない。その時イエスはすでに三十三才の壮年であつたが、母はイエスがまだおさな兒で祝福を受けるために神殿へ連れて行かれた当日にシメオンが言つた一つの予言を心の中に大切におさめておいでになつた。

あなたは画家がえがいたそれを目にしたことがあるか。その中の母はおさな兒の寝ている小さな寝台の上へかがみ込んで、シメオンの言つた言葉を想ひ起しながら未来のことをじつと待ち受けてゐる。その画には「劍なんじのわき

腹を刺し貫かん」（ルカ伝二〇二十五—三十五参照）という題がついてゐる。何という大きな責任、何という重い十字架であろう、然しあの予言により、母は自分の子によつてすべての人々が祝福を受け幸福になり救われて高い榮えに昇ることを知つて確信を新たにした。

あの予言が事實となつて現われる時が近づいてゐた。そして母性に対する偉大な尊敬の言葉が発せられたのはこの時であつた。息子は十字架にかかり、刃はまさにそのわき腹を刺し貫ぬこうとしてゐた。母はその側に立つてゐた。弟子たちもつゝいてゐたキリストに対する愛は弟子たちのすべてをそこに引き留めておくほど強くなかつた。すでに何人かは立ち去つてゐた、その側に母が立つておいでになつたイエス一人をのこしてほとんど皆どこかへ行つてしまつた。その時われらの主イエスはかえり見て母に「おんなよ、見よ、汝の子なり」と言い、全人類に特にあらゆる處に在る息子たちに対する模範として最高度に母を褒めたたえたもうた。それからあの愛する弟子に「みよ、なんじの母なり」と言いたもうた（ヨハネ伝十九〇二十六—二十七）。イエスがこの世を去りたまふに當つては万感胸に迫つたにちがいないが、最後の言葉の大部分は母についてであつた。私だけでなくあなたたちにも与えられた偉大な教訓ではないか。

◇ ◇ ◇  
私はこの世に生きてゐるかぎり、私の母が与えたあの大きな印象を決して忘れないであらう。それはヒラマンに率

いられて戦場に赴いた二千人の息子たちの話を母から聞いた時のことであつた（アルマ書五十三〇十九）。これらの若者たちのことを考えてみたまえ。あなたたち祭司、教師執事だけでなく大祭司、七十人、長老の職に在る兄弟たちよ、彼らを手本と思いたまえ。あの昔の時代に在った二千人の男たちがあのような人生を生きていることができたなら、二千人いな一人、十万人に上る男たちが今日それと同じ生き方のできぬことはない。もしも少しも疑わずに神に祈るなら、その祈りは応えられるにちがいないと若い時に彼らに教えた母によって銘々の心の中に刻みこまれたものこそ、信仰を基にして据えられた彼らの守るべき原則であつた。この母の教訓こそ二千人の若者の証詞であり、その証詞こそ母の教えの結果であつて少年時代に於ける家庭の力を証立している。

◇ ◇ ◇

私とあなたがテニソンの言葉にならつてたたる母への褒め言葉をその子供たちが言えるようにしてやることを、すべての母親の義務でありまたすべての母親の切なる願ひであり最高の喜びでなくてはならない。

「君の話の主<sup>じ</sup>どわが母、名匠<sup>めいしょう</sup>の

靈感受けて創<sup>つく</sup>り為す

汚れを知らぬ名作の、純き様にも似たるかな

その姿こそ、今咲き初めし純白の

いとも清けき花びらに、一筆引きし緑の線

テニソン作「王女」より

わが教会の若い会員の多くは、実際その母の前に立って「私はあなたを敬愛します」という特権をもっている。私たちの中にはずっと前に母を失つてもうそれができない人たちも居る、しかしその母の影響はいつも昔の通り変らずにのこっている。いつの日かあなたたちもまた母に別れを告げなくてはならぬであろう（新しく啓示された真理のおかげで私たちは仮に別れる必要があるだけであることを知っている）。その後あなたたちがこの世でもっているすべては思い出、すなわちあなたたちが母に示した親切の思い出と自分が思いやりのなかった時の思い出だけである。このような思いやりのなかった時の思い出や母をおろそかにした時の思い出の数が少なければ少いほどあなたたちは幸福であるにちがいない。

今母親のある息子や娘たちの一人一人に私は言いたい。

あなたたちの母を母の日にだけでなく、一年中毎日幸福にすることは、あなたたちがもっているすばらしい機会である。もしあなたたちが母にあげるためにキャンディや花をあつらえるなら、母はきつと喜ぶにちがいない。また母の徳をたたえ母を敬愛する言葉を手紙に書いてあげるなら、きつと嬉し涙を流すにちがいない。しかし、あなたたちが母からもらった身も心も純く保ち、いつも清い人格を身につけているならば、母は世界中の母親の中で一番祝福されていると喜びよろこぶにちがいない。

# 神権の働きなしには御教の眞の理解はない



ポール・C・アンドラス

核エネルギー、誘導弾、地球の新衛星などの発展および月世界旅行などは今日世界のニュースの中で人の注意を引く主な事項であります。

地球上にあるほとんどすべての人々の注意は、これらの目をおどろかす科学上の業績に関係ある諸発見やいろいろの出来事に集中しています。しかしながら、人類の福祉にとってはおおに大切な二つの出来事が百二十九年の間ほとんど見すごされてきたことは、まことに残念なことであります。

・・・一八二九年五月十五日の出来事・・・

千八百二十九年の五月十五日に、全能の神の御前から一人の使者

が来てアメリカ合衆国ニューヨーク州に於て二人の若者を訪れ、この二人にバプテスマを施す権能と物質上の事がらに於て神を代表する権能とを授けました。その後間もなく更に三人の使者が全能の神の命令を受けて来り、この二人の若者に霊に就ける事柄に於て神を代表する権能を授けました。天の使者が訪れたというこれらのことは、立派な証拠がある歴史上の事実であります。またこれらの使者が二人の若者に授けた神を代表する権能は、地球上に住むすべての人々の生活に光明を与え喜びを与える力があります。まことに、この世に住むすべての男の人々がこの権能（神権）を受けて以て正しく使うことは、天にまします私どもの父のみむねであります。またこの世に住むすべての女の人々が、それぞれの家族の中にある神権保持者を通して、各々の生活の中でこの権能（神権）の祝福を受けることも天にいます私どもの父のみこころであります。

・・・神権を持つ者、その人は？・・・

神権をもつ者たちがその生活の中へ義を入れることによって、神権は彼らの生活に数々の祝福をもたらします。義とは神の御教えを実行すると定義してもよいでしょう、そして誰でもその生活を神の御教えに一致させる時その人は真の喜びを経験しはじめるにちがいありません。特に誰でも神が完全なお方であること、全人類は文字通り神の子供であること、神はその子供らがみな救われることのできる救いの計画を立てたもうたこと、そして神はこの救いの計画を神の子供らに啓示したもうたことに気付くようになると、その人は計り知れない価値のある知識を受けているのであります。このような人が、それから救いの計画の詳細を学び始め、更にこれらのくわしい御教えにその日常生活をきちようめに一致させつづけるときに、その人は以前よりも一層義しい人になります。すなわち完全ではないが前よりも完全にひとときわずつと近くなります。

その人は過去の罪と過ちとを捨てて、バプテスマを受け、神の真の教会と王國とに加わります。その人は個人的純潔を厳格に守り、道徳上汚れない人であります。その人は自己の収入の完全な一割を主に納め自己の利益を思いません。その人はアルコールを含む飲みもの、タバコ、茶、コーヒーを飲まず、従ってめぐみを受けて肉体の健康を増進し精神は活発であります。その人は隣人を正しく取扱ひ、隣人から真の尊敬と愛とを受けます。その人は無料で教会内の責任ある地位を引き受け、他の人々に救いの計画を教えることに専念いたします。従ってその人は自分を愛し尊敬する数多くの友人を

めぐまれます。

その人はいと高き神の神殿の中で自分の妻子と結び固められ、自分と妻子とが忠実に神の誠命を守るならばその一家族は永遠に続くことを知る喜びを受けます。その人は系図の研究をして、救いのために必要ないろの儀式がすでに亡くなった自分の血縁の者たちのために執り行われることがわかります。その人はこれによって血縁の者から永遠の感謝を受け、自分が行った働きに与えられた大きな喜びを感じます。その人の生活のあらゆる面は新しい光彩を帯びその人は心の中に真の喜びと幸福とをもって、人生のあらゆる経験を経験します。その人は世の中の人と仲良くし、隣人を愛します。

・・・平和の代価は義であります・・・

平和とまた愛と調和とをもって共に生活する能力とは世界中で最も大きな必要であります。この大きな必要は、地球の新衛星や誘導弾やまたは宇宙旅行の乗物の必要をはるかに抜きん出ています。しかし、平和の代価は義であり、また神権がなかったなら、神権の働きなしには神と神の御教えの真の理解は得られるはずがないという簡単な理由で義のあるはずがありません。従って、新訳聖書の中でバプテスマのヨハネとされている偉大な指導者が神の御前から来ってジョセフ・スミス（二代目）とオリヴァ・カウドリとに千八百二十九年五月の十五日にアロン神権を授けたときは、全世界にとって最も大切な出来事でありました。数週間後に三人の古代の使徒ペテロ、ヤコブ、ヨハネも神の御前から来ってこの二人の若者にメルケゼデク神権を授けたときは、これも前と同じく全人類にとって最



も大切な出来事でありました。全世界の民の中で九十九・九五パーセントまでこれらの偉大な出来事をもって聞いたこともないのは全く残念なことであります。さりながら、これらの出来事は比較的短い年月の中にその本当に重要なことが今に世界中に認められるにちがいありません。

・・・偉大な出来事を再考せん・・・

私たちは末日聖徒として五月と六月中に、今から百二十九年前に起った偉大な出来事の意義を再びよく考えようではありませんか。また私たちは、この末日の時代に数々の予言者と数々の神権保持者を通して完全なままに回復された救いの計画の中にある御教えを、厳密に私たちの生活と一致させるよう新しく決心しようではありませんか。また義がなくては神権の祝福が失われるにちがいないことをいつも忘れないようにしようではありませんか。

「見よ、召さるる者は多けれども選ばるる者は少し。選ばるることなきはこれ、そもそも何の故ぞ。そは、人々の心甚しくこの世に属けるものの上にあり、唯々人間の譽を得ることのみを望み、次の如き一つの戒めを知らざるによる。曰く、神権の権能は天の能力と固く結びつきて離るべからざるものにして、天の能力は正義の原則によりてのみ支配し運用し得るものなり、と。この権能のわれらに与えらるる事もあらんは眞実なり。されどもし己が罪を蔽いかくさんとし、われらの高慢、空しき野望を充たさんと企て、または幾分にも正しからざることによりて人の子らを支配し、統御し、強制せんとする時は、見よ諸天は退き去り、主の「みたま」を失はむ。」

の「みたま」退き去らば、神権またはその人の権威は終りなり。見よ、その人いまだ覚らざる前、独り置かるるままにとげあるむちをけり聖徒を追害し神に逆きて闘をなす。われら悲しむべき経験によりこの事を知る。およそ殆んどすべての人間は、少し許りの権威を得たりと思うや、忽ち正しからざる支配を始めんとする生れつきの性癖あり。これすなわち、召さるる者多けれども選ばるる者少き所以なり。如何なる権力も勢力も、神権によりて維持する能わず、または維持すべきものにあらず、ただ説服と堅忍と偽らざる愛による。また、親切と淨き知識すなわち偽善にあらずしてその人を甚だ大いならしむるものによる。すなわちつ聖靈に感動しては機に臨みて激しく人を責む。然る後、また彼の汝を敵視せざらんため責めたるその人に一層の愛を示す。かくて、彼は汝の誠実は死のきずなよりも強きことを知るべし。すべての人に対して、また信仰ある家族に對して汝の腹中を滋愛にあふれしむべし。絶えず徳を以て汝の想を飾るべし。然る時は、汝の自ら信ずること神の前に強くなりて、神権の教理は天より下る露の如くに汝をうるおさん。聖靈は常に汝の伴侶となり、汝のしやくは眞理と正義の変ることなきしやくとなり、汝の支配は永遠の支配となりて強いらることなく永遠に汝に流れ込まん。(教義と聖約第百二十一章卅四節―四十六節)

## 「日の光榮、月の光榮、星の光榮」(十二)

佐藤龍猪

日の光榮あり、月の光榮あり、星の光榮あり、此の星は彼の星と光榮を異にす  
(コリント前書十五章四十一節)

わが父の家には住居多し

(ヨハネ伝 十四章二節)

## 一、救いの階級

キリストの爲したもうた身代りの「ぎせい」により万人は「贖われ」て復活をする。

この「贖い」の力はすべてのものに及び「滅亡の子」でさえも「贖われる」。「贖われ」て不死不滅の復活体を得たすべての人類は神の前に出て審判を受け、ここに於て「救われる」か「救われない」かが定まる。

現世に於て義しい行為をした者は審判の後、サタンの国に追いやられない、すなわち「救われる」のである。しかしこの時、「救われる」者はすべて神の国へ入って神の前へ行くが「救われない」者はサタンの

父の家には住居多し」と仰せになった(ヨハネ伝十四〇二)。「救われる」者は皆一様の光榮を受けるのではない、「救い」には無數の階級があつて各人はその行為に応じて行く所が定まる。神の目的は万人を「救い」、各自の行為に應じた程度の光榮をもつ国に入らせるにある。ただ「滅亡の子」らを除く。彼らは「神の能力を知りこれに与る者とせられしも、而も悪魔の力により打ち破られて真理を否み、神の能力に反抗する者共」(教義と誓約七十六〇三十一)であつて、彼らは自ら進んでサタンの僕となり、神に謀叛をしたのであるから悔改めをさせることができず(ヘブル書六〇六)、従つて彼らは「救われる」ことができない。

国へ入つて地獄へ投げこまれる、すなわち天国と地獄、この二つの場所だけが人類の未来のために備えられていて、天国にはあらゆる部分に同じ光榮があり地獄には隅から隅まで恐怖がある、という教義は不完全である。何となれば、これでは神の前へ行くに値しないと同時に、神の前からサタンと共に追い払われるにも値しない者の行くところが無いからである(「救いの教義」第二卷二十頁、「信仰箇条の研究」百十九頁)。

その余の者は一人のこらず「救われる」、この世に於て悪を極めた者であつても、その罪の価をのこりなく償つた後、ついに彼らのために用意してある光榮の国へ入るのである。すなわち「滅亡の子」らを除いて万人は救われる、しかし同じ程度の光榮を受けるわけではない、各人はその身で爲した行為と心の念に應じて審判を受け、それぞれに相当した光榮の国に備えられた住居に行くのである(「救いの教義」第二卷二十一頁)。

## 二、「日の光榮」に救われること

完全に律法を守り、神の誠命のすべてに従う者は「日の光榮」の国で完全な「救い」を受ける。「日の光榮」に「救われる」者は、「長子の教会」に属して父なる神のもちたもうすべてを与えられ、メルケゼデクの神権に等しい「最高者」の王にして祭司たる者となり、「日の光榮」の体を持ち「その光榮は日輪の光榮にしてすなわち神の光榮なり。この神の光榮たるや最高の光榮にして、而も書の中には大空の日輪をその光榮の表徴として誌せり」とある光榮を持つ（「救いの教義」第二卷三十一頁、「教義と聖約」七十六・五十一―七十、「信仰箇条の研究」百二十頁）。

また一方、福音があつたが福音を知らずに死んだ者、すなわち福音を受ける機会がなくて死んだが生きているうちに福音を聞かされたなら福音を受け入れたにちがいない者、これはみな「日の光榮」の国に入り得る者である（「予言者ジョセフ・スミスの教え」百〇七頁「英文」）。

## 三、「月の光榮」に「救われる」こと

「月の光榮」に「救われる」者は、「月輪

の光榮の大空に於ける日輪の光榮と異なる」ように最高の光榮と異っている第二の順位的光榮を受ける者たちである、これらの者は正しい人であるが「日の光榮」の国に入るために必要なことに従わず、人間の巧智に眼をくらまされて神の一きわ高い律法を受けてもこれに従うことのできなかった者である。また、これらの者は「キリストの証をするに雄々しくない」ことを証明した者が故に完全な光榮を受ける資格がない者である（「信仰箇条の研究」百二十頁、「教義と聖約」七十六・七十一―七十九）。

## 四、「星の光榮」に「救われる」こと

「星の光榮」は「月の光榮」よりも更に小さい光の光榮であつて、大空に於ける月輪の光榮と諸星の光榮が異っているが如くである。星の数が無数であつて浜辺の砂の数よりも多く、その輝やきが各々異っている如く、「星の光榮」の世界に於ける次の次第も無数であつて各々相異っている。そして「星の光榮」の国に入る者は神を恐れぬ邪惡な者、地球上で神の怒りを受けた者、地獄に投げこまれてそこで最後の一塵まで償いをせねばならぬ者、またキリスト

の福音を受け入れないが（聖靈を知らないから）聖靈に謀叛をすることができなかった者、以上の者は第一の復活に与らない、従つて最後の復活まで惡魔とその使者たちの居る所から出てくることができない。それには彼らが邪惡な生活をしたからである。それにもかからず彼らは「贖われ」て「救い」を受ける。しかしながら、「贖われて救いを受ける」（復活をして各自に相当する榮を受ける）前に、彼らは自己の罪を悔改めて福音を受け入れ、イエス・キリストを世の贖い主であると認めるにちがいない。「月の光榮」「星の光榮」の国に於ては、その中に住む者の能力、機会、進歩等に限界がある、これは彼らが「滅亡の子」のように「受くべかりしもの」を進んで受けざりしによるのである（「救いの教義」第二卷、二十二頁、「教義と聖約」七十六・八十一―八十五）。

## 五、「日の光榮」の国は神の国

「日の光榮」の国は聖書の中で「神の国」と言つてある。「まず神の国と神の義とを求めよ」（マタイ伝六〇三十三）。「神の国」（日の光榮の国）に入る者は「不死下滅」の上に「永遠の生命」も受ける。すなわち「不死下

滅」とは万人に与えられる賜であつて「無限に生きる」ことであり、「永遠の生命」とは「永遠」(神・天父と御子)の前に住む生活、すなわち「天父と御子」の生活のような生活である。「狭き門より入れ、亡びにいたる門は大きくその路は広く、之より入る者多し。生命に至る門は狭くその路は細く之を見出す者少し」(マタイ伝七〇十三・十四)と仰せになった時、イエスは「神の国」(日の光榮の国)について仰せになっていたのである(「救いの教義」第二卷、二十四頁)。

## 六、「日の光榮」の国にある最高の位

「日の光榮」の国の中にある最高の位に昇る(昇<sup>エキザルテーション</sup>榮)者の数は、全人類の数に比べると比較的少数である。この最高の位に昇った者は神の嗣子、キリストと共同の世嗣となる、すなわち「神の子」となつて「日の榮」の国に属するあらゆる能力と威勢と領地とを受け、あらゆるものにうち勝ち、祭司となり王となり、イエス・キリストの如くとなる(「教義と聖約」百三十一章「救いの教義」第二卷二十四頁)。

パウロは「すべて神のみたまに導かるる者はこれ神の子なり。……みたま自らわれらの霊と共にわれらが神の子たることを証す。もし子たれば世嗣たらん、神の嗣子にしてキリストと共に世嗣たるなり」(ロマ書八〇十四・十七)と教え、またヨハネは神の誠命を完全に守っている者は「神の子」である、而してキリストが来りたもう時にそれらの者はキリストの如くとなる、と教えている(ヨハネ第一書三〇二・一三)。またガラテヤ書(四〇五・七)にも「……すでに子たれば、また神によりて世嗣たるなり」と言つてある。以上のように、この教義は聖書の中に教えてあるにもかかわらず多くの人々がこれを見落して居るから、当教会独特の教えの一つになつてゐる。

キリスト教の伝道は「神の国」(日の光榮の国)の最高の位に昇ること(昇<sup>エキザルテーション</sup>榮)の道を説くことである。キリストの贖いの力により、この地上に生を受けたあらゆる人類は、たとえそれが極悪の人であつても贖われる(すなわち復活をする)。神に對して謀叛した「滅亡の子」らでさえも復活体を得て「不死不滅」の者となる。そして復活の後に審判を経て、各自の行為と心の念

いに應じて、前に述べた三つの光榮の国のいずれか一つにその居るべき所を与えられる。ただ「滅亡の子」らを除く、彼らは神に對する謀叛の故にサタンと共に神の前から追放される(すなわち「救われない」のである)。その他の者は三つの光榮の国のいずれか一つに行く(すなわち「救われる」のである)。従つて、バプテスマを受けなかった者たち、この世で福音の儀式を受けなかった者たちでも「月の光榮」の国か「星の光榮」の国かへ「救われる」。しかし「日の光榮」の国(すなわち聖書に書いてある神の国)へ入つてその最高の位に昇るには、イエス・キリストの福音の教えを完全に守らねばならない。すなわち福音の教えを信じて必要な儀式を受け、神の誠命を守り、「昇<sup>エキザルテーション</sup>榮」(日の光榮の国の最高の位に昇ること)に必要な誓約を守らなければならぬ。(予言者ジョセフ・スミス

の教え」十二頁「英文」、「救いの教義」第二卷二十六頁)。

## 七、地球は「日の光榮」の天体となる

地球は生物に似ている。生れて成長し、ノアの時になつて水のバプテスマを受けた(プリガム・ヤング講話録第一卷二七四頁)そし

てこの次にはキリストが再臨なさる時に火と聖霊のパプテスマを受けるはずである（ブリガム・ヤング講話録第八卷八十三頁）。  
 福千年が終わってからサタンの軍勢とミカエルの軍勢との間に大戦争が起り、その結果サタンの軍勢が敗退する。そこで第二の復活が起って最後の大審判が行われ、それから地球の終りが来て、地球は酷熱によって溶かされ死と同じ変化を受けるが、復活をして再び新しい地球になる。地球が創造された後、神は自ら創りたもうたものを見て「善し」とのたもうた（創世記第一章）。

しかし、アダムが神の前から追放されてからは、人類はもちろん地上に住む空の鳥、獣、水に住む魚、草木さては地球自身までも「死なねばならぬ」ものとなった。従って地球はやがて死と同じ変化を受けねばならない。アダムが「墮ちて」からこのかたの地球の状態は「星の光榮」の国の如き状態と言うことができるであろう。而して福千年の始めに当り地球は火と聖霊のパプテスマを受けて清められ樂園の光榮を有する状態、「月の光榮」の国の如き状態となる。それから最後に酷熱によって溶かされて死ぬが、死から復活をして再び新しい地球と

なつてよみがえり「日の光榮」を有する天体となる。そして、この「日の光榮」に輝やく新生の地球の上には「月の光榮」「星の光榮」にふさわしい者たちは居ることができず、新生の地球は「日の光榮」の体を持つ者だけの住処となる。この時「幸福なるかな柔和なる者、その人は地を嗣がらん」（マタイ伝五〇五）と仰せになったキリストの言葉が現実となつて現われるのである。（「救いの教義」第一卷八十三頁）。

## 余 録

創世記第十八章二節に出てくる「三人の人」は何者であるか。第一節から十八節まで読むとこの「三人の人」の中の何れかが「主」なる神のように思われる。しかし、この考えは誤りである。何となれば「主はマムレのテレビンの木のかたわらでアブラハムに現われられた」（第一節）で文章が終っているからである。「それは昼の暑いところで、彼は天幕の入口にすわっていたが目を上げて見ると、三人の人が彼に向つて立っていた」（第一節）以下は別の文章である。それであるから、この「三人の人」は普通の肉体をもった人間たちであつて、

アブラハムの歓待に応じて足を洗い木蔭で休息し、そなえられたバター、乳、小牛の料理を食べた。「主」なる神はこれら「三人の人」の何れの一人でもなかった。それなら第三節に出てくる「わが主」とは何者のことであるか。欽定訳聖書（英語）には「My Lord」とある。この文字を第十三、十四、十七―廿節に出てくる「主」「the LORD」と比べると明らかに区別があるはずである。すなわち第三節に出てくる「わが主」「My Lord」とは目上の人または客人に対する呼びかけの言葉にすぎない。第十三、十四、十七―廿節に出てくる「主」「the LORD」と「主」なる神のことである。予言者ジョセフ・スミスの改訳には第三節の「わが主よ、もしわたしがあなたの前に恵みを得ているなら、どうぞしもべを通り過ぎさないで下さい」が「わが兄弟たちよ、もし我汝らの前に恵みを得たるならば、何とぞしもべを通り過ぎすことなかれ」としてある。（ジョセフ・フィールディング・スミス長老著「救いの教義」第一卷十六頁）

☆

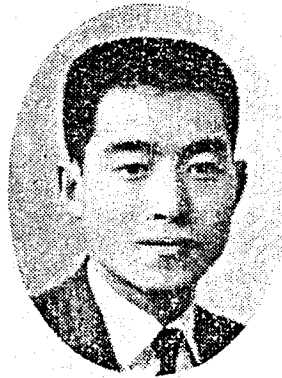
☆

☆

☆

# 極東に於けるモルモン

## 私の改宗



梶山克広

(宣教師)

私もまた、無神論者の一人でした。ジョセフ・スミスが神とキリストを見たときいて笑いました。来世があるときいて笑いました。しかし今は、モルモンの信者の一人として心から神、実に生きたもうと証しする者であります。

私の祖父母も両親も、格別宗教というものに心を寄せていませんでした。ときをり、仏壇や神棚に手を合わせて拝んでいるのを見掛けるだけでした。そんな家庭に育ったためか私も宗教に対する何物も、持っておりませんでした。

八才になった時、おそろしい原爆が母と兄を奪い去り、私にとってまったく死は恐怖となりました。末子として育った私には、母の死は大きなショックでした。祖父母の死に直面した時、それは、さらに大きなものとなりました。恐怖と孤独とが自然に神へ祈る事へと導いてくれました。母を返えして下さい々と祈ったのがはじめての祈りでした。

それでも年をとるにつれてそんな事はばかりしい事だと考える様になり、神などいるはずがないと云う結論を自分でつくり出しておりました。中学時代もそうでしたが高校に入っても同じ事でした。

私がこのモルモン教会を知ったのは高校時代を終ろうとしている頃でした。電車の中の

宣教師を通してでした。神を求める気持ちからではなくちょっとした好奇心から教会へ出席する様になりました。教会の第一印象はすばらしいものでした。窮屈な場所だと考えていただけに暖かい楽しい雰囲気は私を引付けるに充分でした。宣教師の親切と愛が土台であった事は云うまでもありません。私の求道生活は比較的長いものでした。宣教師と勉強をはじめたのは、教会に出席してから六ヶ月以上も後のことでしたし家庭集会も八ヶ月余り受けました。家庭集会を受けた当時、私はジョセフ・スミスの見神に疑問を抱いておりました。現実からあまりにも遠い事に思えたからです。家庭集会を重ねている折でさえ心から祈った事がなかつた事を告白せねばなりません。

それは智恵の言葉について学んでいなかった時の事でした。宣教師達とアルコール類を一切のみまさんと、約束しました。ところが次の日、勤務先で祝事があり、とうとうビールを口に入れてしまいました。私は宣教師にももちろん詫言しましたがその時の宣教師の言葉を今も、はっきりと憶えております。「私は大丈夫です。おこっておりません。しかし、もう私は貴方と約束致しません。私との約束

だからよい様なものですが、神様との約束だったらどうしますか？」

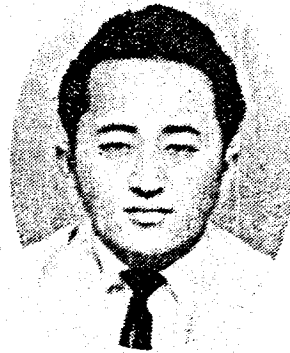
私は約束の真の意味を理解しました。

家庭集会をはじめから四ヶ月過ぎた頃だったでしょうか……真剣に祈りました。いゝえ祈り続けました。私はその時聖霊を強く感じ、この教義の真実性を知ったのであります。同じ月に秋期地方部大会があり、伝道部長より々悔い改めて、そのしるしにバプテスマを受けなさい々と聞き、この時も強く聖霊の導きを感じました。これより一週一度であった家庭集会を二度にして、翌年二月十六日に私もよろこびを持ってバプテスマを受けたのです。

今、私は幸せです、真理を見出しました。私の祈りがそれを教えてくれたと知っております。神に心から話す時、最上の満足を味わいます。

私は宣教師から導きを受けました。私もまた今、同じ職にあつて御言葉を広めております。私はこの機会に、心をつくし、勢力をつくし、思いをつくし、体力をつくして働きます。神と人のために……

## 私の改宗



横田 光 順

(普天間第一副支部長)

私は一九五七年二月二十三日にライト長老に依りバプテスマを施され、真の教会の会員になる迄、多くの異った教会の門を叩きました。が、何一つ証詞を得る事は出来ず、毎日、望み無き日々を送りました。

沖縄で伝道が開始されて間もなく、私はライト長老や、烏袋長老の懇切なる御指導によつて、すばらしい福音を学び、幾多の難問を突破して会員になり早や四ヶ年の星霜は移りました。四ヶ年前の事を回想する時、感慨無量であります。

ハワイ出身のアイリン・タワ姉妹は以前に日本で宣教師をなさった事もあり、普天間支部のために伝道開始以来まる四ヶ年間、雨の日も嵐の日も美しい献身をして下さり普天間支部の会員一同にとっては忘れ得ぬ人であ

りますが、去年の十月、多くの兄弟姉妹にお生まれつゝ、イタリヤに転勤なさいました。

タワ姉妹が米陸軍雇用員として来島した當時はまだ沖縄人のために末日聖徒イエスキリスト教会はありませんでした。おそらく此の島に住んでいる沖縄人で最初に当教会の名を耳にしたのは私だと思つて居ります。と申しますのはタワ姉妹が出島したのが一九五五年十一月二十九日、その翌日の三十日に米陸軍スクレン図書館で彼女に会い、伝道が開始される時に、再び会う事を誓い、明けて一九五六年四月六日遂に沖縄に於ける伝道は開始されました。タワ姉妹との初対面の日から満一年目の一九五六年十一月三十日に不思議にも劇的な再会をしたのであります。

それまでの私の生活は実に悲惨なもので、私の魂は乾き、かつてジョセフ・スミスが真の教会を求めてさ迷った姿を思いだしたと云つても過言ではないと思つて居りました。と

一九五二年四月の大会で、しい世の中に、われわれが熱う、然し胸の中には神の神権マシユウカウレー使徒のさ心に祈り求めている自由を再が存在し、これにシオンがあられたお話の中から、び返さんことを神に祈り奉るのです。又、義の為に生命

「今日」、あなた方の心の中る。

には、この偉大な教会の中心「また」あなた方に申し上げる。親密に提携して、規則正しく集会に出席し、国の法方活きて居り給うことを知っている

## 君達はパン種である

マシユウ・カウレー

意味においてはその願いが満されなくて此所へ来られないのを喜ぶ次第である。ご存じの

は神の独り子の特

通り、世界は自由の新しい誕生を必要としているがそれは義の新しい誕生なしには実現しない。そしてシオンの中心から遙か離れて居るあなた方は実にパン種である。願わくばこれが種となって、良い実を結び、この意気沮喪した卑

(前頁より続く)  
かく私は此の教会からあの教会へと巡礼者の様にさ迷い歩き、さながら牧者無き迷える小羊でありました。

実に神の御摂理の奇しく偉大なることに唯驚嘆するばかりです。過去の苦しかった生活をかえり見て、現在の祝福された生活を誰が感謝されずに居れましょうか。感涙にむせびつゝ、永遠の父なる神には栄光、末日聖徒の上には平和と繁榮あれと絶叫せざるを得ません。





# 母の日



五月八日

五月八日は母の日である。フィラデルフィアのアンナ・ジャークヴィスという少女が自分の母や他のすべての母に感謝したいと望み「母の日」という考えを作った。この一少女の亡き母をしたう心持は全米の人々の心を動かし、五月の第二日曜日を国家的な祭日の「母の日」としてアメリカの国会を通過したのである。

現在この日、世界中の子供達は母への感謝をあらわす美しいカーネーションを胸に飾る。日本は大正年間から年中行事の一つとして「母の日」は行われて来ている。祝日に制定されてはいないが他の祝日にも増して意義ある行事になっている。

# 私の母



柳田 征史

(名古屋支部)

教会の雑誌「インプルーヴメン

ト・エラ」の一月号で、「理想の母とは」という記事の中に、主婦

先生、説教者、子供の心理学者、看護婦、厳格な教師、植木屋、物語をする人、PTAの役員、教会の役員、床屋、近所の人のよき友夫の愛人で妻、というのがありました。

一口に母といっても、実に大きな役目である事に気がつきます。私は、このほかに勉強



洗濯婦、掃除婦、料理人、裁縫師、帳簿係、買物する人、家庭医師、

母を、家の中をのそのそと歩まわっている

の先生（父と一緒に個人教授をしている）と自動車の運転手を演ずる母を持っています。また、よき習慣をつける人でもありました。現在私や弟の習慣になっている事の多くは、母に教えられた事になっています。まさに、その超人ぶりに驚かないではいられません。でも私達が生活の動力源である空気にほとんど気がつかないのと同じように、私はこの偉大な

一人の女の人としか感じられないのが、ふつうです。でもあの目がまわるほどの仕事を見事に片づけてくれる彼女が突然寝込んでしまつて、その仕事をほとんど出来なくなつた時、ほかに女の人がないので、父と弟とボクの三人は何も出来なくてあわててしまうのです。私の家庭にもし母がいなかったらこんなふうになってしまうのかと、夏に海やプールで空気の有難さに気がつくように、改めて母のそれに気がついて、日ごろからもつと母に感謝して母を助けなくてはならないと、悟るのです。しかしそれも母が元に戻るとすぐ忘れてしまつて、文句をいったりいろいろ彼女の仕事を多くしたりしてしまうのです。でも彼女はそういう事についてはあまり不平をもらしません。そのかわり私達の不節制や怠惰に対しては一番よく怒ります（父は派手に怒るが回数が少ない）。

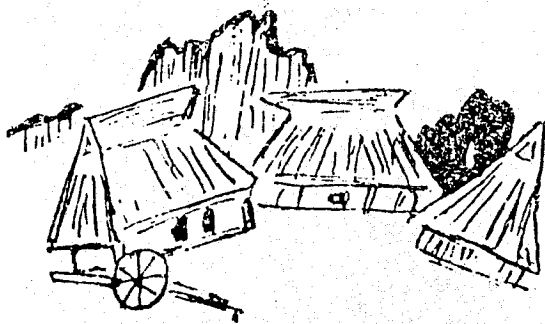
また母は家族の中で一番早く主に導かれ、会員になって、父をはじめ私たち兄弟を、一生懸命に教会へ導びいて下さった人でもあるのです。こういう家族はほかにあります。本当に母のおかげで私たち一家は現在精神的に幸福な生活をしていられるのです。最近では東京から引越して来た祖父母と合せて六人の

家族になりましたが、大神権者が二人、小神権者が二人という神権に満ち溢れた環境で日々を送っています。このほかに母は、家では「けちんぼ」の定評があります。彼女はそういわれる度に「そうじゃなかったら破産してしまうじゃないの」というのですが、成程と思わないではられません。

一年の時英語で *What I am I owe to my mother*. (私が今日あるのは母のおかげです) という文を *owe* (のおかげとする) という単語が出てきた時に例文として習いましたが、確かにその通りだと思いました。

母についてももう一つ考えつく事は *owe* の、もう一つの意味の（借りがある）という事です。私のようなのんきな子供は（ボクなんか子供と呼んでいいのか知らないが）母に対して、ほとんど何も役に立つ事をしていませんが、彼女からはさっきも気がついたように、数え切れないほどの恩恵（もう少しで人間が神から受けているのと同じくらいになる沢山の恩恵）を受けています。母が死んでしまわないうちにこの借りを返さなくてはならないと心配する必要もなさそうですが、母の目に当って、今一度その恩恵を思い起して、主に私たちがなさなければならぬように、母の

戒めをもっともつとよく守り、母を助けるようにしなければならぬと思ひました。  
できたら *Jack and Betty, Book Two* にあるように *Mother's Day* には、母よりも早く起きて、あのやっかいな食事のしたくでもしてみようかなと思っています。



# 私の母



私が十六年前、この世に顔を出して以来覚えていた限りの女性の顔を思い返し、私自身の心に聞いてみた。「一番尊敬している人は



誰？」と、答えは簡単だった。「勿論、お母様よ」。今日、その最も尊敬する母のことを、

## 秋元 絃江

(岡町支部)

読者諸君に披露出来ることを非常な光栄と感じ、心から喜んでゐる。

上野音楽学校(現在の東京芸術大学)を出た母は、今でも家でたくさんの生徒にピアノを教えている。また、そのかたわら、一家の主婦、あるいは母として、教会では扶協協会の会長としての務めにベストをつくして働いている母を見る時、私はいつも敬服の念を抱かずにはいられないのである。

母がバプテスマを受けて、教会員となつたのは、今から七年前の春だった。その頃、まだ幼く、家庭集会の時でさえもふざけたり笑ったりで、なかなかまじめにしなかった私たちを、母はいつもやさしくたしなめ、日常のちょっとした会話に、神の福音をおもしろく説明し、少しでも私たちに興味を持たせようと努力してくれた。そして、ついに、母がバプテスマを受けた一年後の八月十五日、私たちも教会

のある岡町にほど近い箕面の清流で、バプテスマを受けることが出来たのである。当時、姉(彬江)は十一才、私は九才であった。その後も、幼いために無理をいい、はなはだ会員らしくない行いをする時にも、母はその時々斬新な方法でもって私たちをいましめてくれたものである。ある時には聖書を開いて私たちに示したこともあった。ある時には、「人に対し、良いことを話し悪いことを話さない」や、「自分の持っている才能をのばす」「他人の欠点をさがさない」「人を真心からほめる」などの道徳の教えの中から、特に私たちに必要なことを紙に書いて、私のお部屋の壁にはり出したこともあった。そして私たち——特に私なのであるが——がおしゃべりをしすぎると、「七つ目を読んでごらん。何て書いてある?」9 10は沈黙で1 10をお話するんでしょ、などといわれたものであった。こんな母の助力によって、私たちが二人共、仲良く信仰の灯を小さいながらもしっかりと燃やし続けていられることを感じ、心から感謝している。私たちはこんな議論をしたことがある。「ねえーお母様、私が結婚したら、私の家へ来てね。」「いやよ、私のとこよ。ねえー」と姉「それじゃ、一月ごとに、交代で両方の

家へ来てよ。」「だって、そんなことしたら御主人に悪いわ。」と、さっそく心配症の母「私たち、そんな人とは、絶対結婚しないもの」今から何年後のことかわからないが、私たちの間には、こんな契約が出来ているのである。私たち二人は、よく人から「仲の良い姉妹ですね」といわれることがある。また実際、私自身でも、そう思っている。私たちをこの様に育ててくれたのも、この母である。

母は熱心な教会員であると同時に、私たちの義望の的たる良き家庭の主婦なのである。

母のお手料理は、まさに定評のあるものである。ちょっとやさつとお料理屋や食堂では決して母の腕にはかないっこない。どんなお料理でも母がちょっと手を加えただけで、まるで違った味になってしまうのだから不思議である。お料理の味に関してはやかましい（他のことにもやかましいが……）父までがさすがに母の作ったものには文句もいえないで、おとなしく食べているのは見物である。お料理だけに限らず、ピアノに、歌に、洋裁和裁、お花と、何でも一応こなしているのだから、私たちが頭の上がらぬのは無理もないことである。

私の記憶する限り、母は非常にやさしい理

解のあるよい母であった。しかし、ピアノに関する限りは例外である。もともと余りピアノの好きでなかった私は、母に直されると口ごたえばかりしたものである。そんな時、母は、私がおれて、素直に母のいうことを聞くまで決して許してはくれない。そのかわり私たちが一生懸命練習する時には、まるで自分のことのように喜び、今でも小さい子にするように私の頭を撫でてくれるのである。

こんな母であるから、私たち——特に末っ子の甘えっ子である私は今でも母を見ていると、無性に甘えたくなくて、この大きなずうたい、をひっさげて母のおひざへのつかってしまふ。父が出張などで家へ帰って来ない夜などは、二人で母の寝室へ入って行き、どちらが、母と一緒に寝るかを決めるのに、姉といひ合いをするという珍騒動のもちあがるのが常である。そのように私たちが心から慕っているこの母はまた非常にほがらかなおもしろい母である。母と私たちが集まった時に笑いの絶えたことはない。私たちが何かでふさぎ込んでいる時にも、母はユーモアのセンスでもって、私たちを吹き出させてしまふ。しかしこの反面、母はこっけいな程涙もろい感情家である。いつだったかこんなことがあった

お台所でお仕事をしていた母の横で、何の話からか姉が幼い頃読んだフランスの小説家であるマローの書いた「家なき娘」を話して聞かせた。母は「まあ、可哀想に……」と喋っていたかと思うと急に静かになってしまった。私たちが不思議に思つて母の顔を見ると目をまっ赤にしているのである。

こんな母をみると私は、子供のぶんざいで「へーお母様って案外可愛いんだな」などと思ってしまう。（母にこんなことが聞けると、ニラまれてしまふかも知れないが）

母はまた私たちが不思議がるほど健康である。そして私たちが心配してとめるほど、何に対しても熱心によくする。「私が健康でいられるのも、すべて神様のおかげなのよ。だから、それにおこたえ出来るよう、教会のために、又、その他の私に与えられたお仕事を一生懸命しなくちゃ……」母は私たちにいつも口ぐせのようにこういつている。

とにかくこの『世界一良い、素晴らしいお母様』（少なくとも私自身そう信じて疑わない）を、持てたことを、心から感謝し、いつまでもいつまでも愛する母が健康で若く、美しくあつてほしいと願う私である。

真理を知れ

ヘンリー・D・モイル



「われらは、永遠の父なる神とその御子イエス・キリストと聖霊とを信ず。(末日聖徒イエス・キリスト教会信仰簡条第一条)」

私共の教会はこの信仰簡条にその基を置いてるのであり、私共の主なるイエス・キリストは生ける神の御子に他ありません。まことにキリストは私共の頭首(かしら)であります。イエス・キリストのこの世に於ける生涯と働きは私共、人類のために立てられた永遠の計画の中にあつて二重の目的

言葉信ずるものであります。即ち

「われらこの世にあり、キリストに頼りて空しき望みを懐くに過ぎずば、我らはすべての人の中に最も憫むべき者なり。されどまさしくキリストは死人の中より甦えり、眠りたる者の初穂となり給えり。それ人によりて死の来りし如く、死人の復活もまた人によりて来れり、すべての人、アダムによりて死ぬるごとく、すべての人キリストによりて生くべし。(コ

リント前書十五章十九―二十二節)先に申しましたようにキリストの贖いは二重であります。即ち第一は人類を墮落より贖うことであります。人類はこの贖いによつて死後再び霊と肉体とが結合して全き永遠の生命を得ることができ、死より復活するのであります。これが人の体を完全に復活させることであります。

贖いの第二の目的は私共がこの世でおかした背罪に束縛されない状態で復活し、そして自らの罪の中にあつて永遠に生きることがないうようにすることでありました。キリストはまた私共個人の罪をこごとく贖い給いました。それ故私共はキリストは世の罪をその身にひきうけ給うたと云うのであります。ヨハネは「それ神はその独り子を賜うほどに世を愛し給え

り。すべて彼を信ずる者の亡びずして永遠の生命を得んためなり」(ヨハネ伝三章十六節)と申して居ります。

ところで当教会の信仰簡条の第二条には「われらは、人は皆各々其身にてなしたる罪に対して罰を受け、アダムの咎に対して罰を受けざることを信ず」と記されてあります。

このようにして私共はキリストの贖いによつて私共に死よりの贖いがもたらされるということを知ることができるのであります。すなわち私共は皆復活に与るのであります。しかし私共が自ら犯した罪より贖われるか否かということでは私共如何によつて定まることではありません。私共はアダムの咎より救われるように、恩恵のみによつて自らの罪から救われないのであります。この簡単な違いを理解することによつて私共は多分に真理と誤謬とを区別する力をうけるようになります。そして私共が自らの祈りに答えて靈感を与え給へと神に乞ひ求める時に神は私共に霊

感を与え給うのであります。また私共が悔い改めるならば、その悔改めは私共を神の律法と儀式とを感謝する念に導くのであります。そして人は自分自身の意志の力を使い、自ら努力して律法と儀式とを守ることによって自分自身を罪より義へと高めることができるのであります。人がこのことをなす時、その人は私共の天の御父の王国に於て永遠の救と高き榮に進むその道を歩んでいくことになるのであります。

パウロはキリストについて「彼は御子なれど、受けしところの若難によりて従順を学び、かつ全うせられたれば、すべて己に従う者のために永遠の救の原となり給えり」(ヘブル書五章八―九節)と語っています。

あらゆる事柄に於てキリストは私共に手本を示されました。実に模範を乗れ給うためにキリストは地上へ来り給うたのであります。如何なることであつてもキリストの御計画からそれることは裁きの際にも或は神の慈悲の面から見

ても正しいとはされませんでした大目にも見られないのであります。更に人生に於てこの道以外の道を追いかけて歩むことを正当化しようと努めて、このキリストの救の道に従わないということには如何なる弁解も如何なる理由もないのであります。キリストは私共が自らの救を全うすることができるように、と御助けになるため来り給うたのであります。

キリストの地上での使命には二つの面があります。一つは、御自身に従う人々にその御言葉をもつて教え給うたと同様に模範をもつてその御計画を教え給うたということであり、キリストはバプテスマのヨハネの手によってヨルダン河で水に沈められるバプテスマをうけ給うてその教えを説き始め給いましたが、ヨハネはその前にこの儀式を執り行う権能を主に正しく委任されていたのであります。キリストは自らがバプテスマをうけ給うよりもっとよい他の方法でこのバプテスマの儀式の重要性を強調し給うことができた

でありましょうか。

「イエス、バプテスマを受けて直ちに水より上り給いしとき、視よ、天ひらけ、神のみたまの鳩のごとく降りて己が上にきたるを見給う。また天より声あり、曰く「これは我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり」(マタイ伝三章十六―十七節)

「……今は許せ、われらかく正しきことをことごとくしとぐるは当然なり」(マタイ伝三章十五節) 私共は次に悪魔に試みられて居り給うキリストを見ることができ、このようにしてキリストは悪魔の力にうちかつことを自らの模範によって私共に教え給いました。私共は皆私共の生活には二つの大きな力があるということを知らなければなりません。また神の力と靈感によってあらゆる悪の力にうちかつことも、抗することもまた悪の力をかわすこともできるということを一瞬も早く学ばなければなりません。またキリストが四十日の間断食し給うたことによつてさえも私共は自分自身が進歩

するために必要欠くべからざる力の根源即ち神との交通をどのようにしたならばキリストと同じく効果的にすることができるといふことも理解することができるのであります。更に救主は謙遜と奉仕の生涯を営み始める方法を最もよく私共に教え給いました。

私共は次に山上で、自らがかつて選び給うた弟子達と他の聴聞者即ち群がる人々にその生活を支配することができた支配しなればならない諸原則を教えて居り給うキリストを見ることができ、これらの教えの中に山上の垂訓と云われるものがあるのであります。ところでその教えが本当にすべての人々によって理解されたならばどんなにかよいであろうに!!しかしすべての人々はキリストの教えを理解しないのであります。キリストの教えはすべてこれまでに聴いた人にとってまたすべて読んだ人にとって或は現在読む人にとつてキリストを生ける神の御子として認めさせるに充分なものであります。

しかしキリストに従った人々は比較的ごく少数であります。余りにも多くの人々が過去の異教徒の慣習に深入りして、私共の主でありまた神の御子であるイエス・キリストを通して示された真理を確信と知識と神の力とをもつて話されてもその真理に対して心を開くに余りにも自己満足し過ぎているのであります。

今こゝでキリストの御教えをこごとくとりあげて話す時間はありません。とは云え、キリストが私共に主の晩餐の聖餐を与え給いそしてしばしば集ってその聖餐に与り、水に沈めらるるバプテスマをうけた際に契約したこと即ち主の律法を守り主の試命に従うという契約を新にせよと命じ給うたことは私共にとって何と有難いことではないでしょうか。

キリストの今一つの目的は十字架上で死に給うてから復活し給うた後迄は全く完成されませんでした。即ち昇天し給う直前にその古えの使徒達に全世界に出て行ってイエス・キリストの福音をあらゆる国民、あらゆる血族、あらゆる

国語の民およびあらゆる人々に宣傳伝えよと命じ給うと共に信じてバプテスマをうける者は救われるであらうと仰せになる迄は完成されなかつたのであります。

「イエス進みきたり、彼らに語り云い給う、我は天にても地にても一切の権を与えられたり。さらば汝ら行きて、もろゝの国人を弟子となし、父と子と聖霊との名によりてバプテスマを施し、わが汝らに命ぜしすべてのことを守るべきを教えよ。みよ、我は世の終りまで常に汝らとともにあるなり。」(マタイ伝二十八章十八―二十節)

こゝに於てまたまた主はあらゆる時代の主の弟子たる者が従うべき偉大な手本を示し給いました。キリストがこのようにして私共に与え給うた御計画は以下のように極めて簡単に述べる事ができるものであります。即ち

私共は他の人々に福音を教える。

福音が神聖なものであるという事は神の賜と力とによって真理を求める人々に示されるのであります。聖句に「……求めよ、さらば与えられん。尋ねよ、さらば見出さん。門をたゞけ、さらば開かれん。」(マタイ伝七章七節)と記されていますがまことに求める人々に与えられるのであります。

私共は自ら行動しなければなりません。私共は自らの自由意志によつて真理を探し始めなければなりません。一度私共が真理を探し求め始めるならば、主が私共に力を与え給い、私共の心にその聖きみたまを満たしめ給うて私共を信仰と悔改めへと導き給うのであります。私共が主の御言葉をうけて理解する時、私共は福音をうけ入れてそれに従うようになるのであります。

当教会の信仰簡条の第三条と第四条には「われらは、キリストの贖罪により、すべての人類は、福音のおきてと儀式とを守ることによりて救われ得ると信ず」、「われらは、福音の第一原則と儀式とは

第一、主イエス・キリストを信ずる信仰、第二、悔改め、第三、罪の赦しを受けるために水に沈めらるるバプテスマ、第四、聖霊の賜を按かるための按手札なることを信ず」と記されているのであります。

私共はさながら神が私共に与え給うたように神の御言葉を他人に宣傳伝えることによつて神に対する愛と献身とを表わし、また自らの改宗を感謝するのであります。私共は教会に於て、家庭に於て、またあらゆる礼拝集会に於て互に福音を教え合いながら日々を過すのであります。私共は福音の真理を遠くや近くにいる人々や友達に宣傳伝えます。私共はこの面に於ても、他のすべての面と同じく主なるキリストの命と模範と教えに従うよう努力するため、伝道を行うのであります。

ペテロと古代の使徒達が万国に福音を宣傳伝えよとのこの委任をうけた後、彼らは実際に福音を宣傳伝えました。そして彼らの伝道の模様を記している最初の記録には以下のように記されて居ります。

す。

「五旬節の日となり、彼らみな一処に集い居りしに、烈しき風の吹ききたるごとき響、にわかにかに天より起りて、その坐する所の家に満ち、また火の如きもの舌のよう

に現れ、分れて各人のうえに止まる。彼らみな聖霊にて満され、御霊の宣べしむるまゝに異邦の言にて語りはじむ。

然ればイスラエルの全家は確と知るべきなり。汝らが十字架につけし此のイエスを、神は立てて主となし、キリストとなし給えり。人々これを聞きて心を刺され、ペテロと他の使徒たちと言ふ『兄弟たちよ、我ら何をなすべきか』

ペテロ答う『なんぢら悔改めて、おのの罪の赦を得んためにイエス・キリストの名によりてバプテスマを受けよ、然らば聖霊の賜物を受けん。この約束は汝らと汝らの子らと凡ての遠き者、即ち主なる我らの神の召し給う者とに属くなり』(使徒行伝二章一節～四節三十六節～三十九節)

ことを預じめ告げ給いしを、かくは成就し給いしなり。然れば汝ら罪を消されんために悔改めて心を転ぜよ。これ主の御前より慰安の時きたり、汝らのために預じめ定め給えるキリスト・イエスを遣し給わんとてなり、古えより神がその聖なる予言者の口によりて、語り給ひし万物のあらたまる時まで、天は必らずイエスを受けおくべし。モーセ云えらく「主なる神は汝らの兄弟の中より我がごとき予言者を起し給わん。その語る所のことは汝等ごとく聴くべし。凡てこの予言者に聴かぬ者は民の中より滅し尽さるべし」(使徒行伝、三章十八～二十三節)

このイエスは汝ら造家者に輕しめられし名にして、隅の首石となりたるなり。(使徒行伝、四章八節～十一節)

今日に於て、またイエス・キリストの教会が回復されてからこのかた百三十年の間、古えのペテロやその同僚達を励まし促したその同じみたまが末日聖徒イエス・キリスト教会の長老達に同じように働くよう勧め促している。千八百三十年以来、教会の若い青年男女が福音を愛するが故にまた聖霊によつて福音が神聖確實なものであるという証を与えられたが故に純粹無垢にして真実な福音を宣べ伝えてきているのであります。これらの人々は万人に悔改めを叫びそして救主によつて臥共に与えられた生命と救の計画を教えるというこの使命を達成するためその時間とその手段とを捧げているのであります。この福音は予言者ジョセフ・スミスの媒によつて今日、完全、簡潔、純粹なまゝでこの世に回復されております。

なき手とをもつて自らの生活と生命とを伝道事業に捧げながら次のように語っているであります。

「イエス・キリスト及びその十字架に釘けられ給ひし事のほかは、汝らの中において何をも知るまじと心を定めたればなり。我なんぢらと偕に居りし時に弱く、かつ懼れ、いたく戦けり。わが談話も、宗教も、智慧の美しき言葉によらずして、御霊と能力との証明によりたり。これ汝らの信仰の、人の智慧によらず、神の能力に頼らんとめなり。

録して『神のおのれを愛する者のために備え給ひし事は、眼いまだ見ず、耳いまだ聞かず、人の心いまだ思わざりし所なり』とあるが如し。

それ人のことは己が中にある霊のほかに誰か知る人あらん、かくのごとく神のことは神の御霊のほかに知る者なし。(コリント前書二章二節～五節、九節～十一節)

当教会に加入したすべての改宗者は今日自らが見出した事柄を他の人々に伝えたいという望みをもその心にかけているのであります。



真理を知ること悦びがありま  
す。また真理を他の人々と直覺的  
に分ち合うことに悦びがありま  
す。これが聖靈の賜であり、私共  
が改心したこと確かな兆であり  
ます。私の友よ、貴方方の家庭に  
福音をもたらすために必ずしも  
すべての教会員がその家庭を後に  
して世界に伝道に出で行くわけは  
ありません。しかし教会員は生涯  
中、いつも自らの手の届く範囲内  
で世の人々に神は生きて居り給う  
という証即ち安らぎをその心にも  
たらす証即ち天の御父よりのみも  
たらされる証を宣べ続けているの  
であります。

今日のイスラエルの長老として  
私共は世の御言葉の主の人々に宣  
べ伝え、天の御父の息子や娘達に  
悔改めを叫ぶ責任をうけて居りま  
す。兄弟でありまた姉妹である全  
世界の人々よ、イエス・キリスト  
御自身が教え給うた福音の簡單な  
原則を皆様方に伝えようと熱心に  
求めている当教会の宣教師にその  
福音を説く機会を与えて下さるよ  
う切に乞い願うものであります。  
これらの宣教師は神の権能をもつ

て皆様方の許にお伺い致します。  
彼ら宣教師は福音を宣べかつその  
儀式を執り行う神の権能と權威と  
を附与されている者達でありま  
す。また彼ら宣教師はこれまでに  
数万、数十万の人々に悦びをもた  
らしてまいりました。今日こゝに  
集っている私共は皆これまでの宣  
教師の同じような働きの結果に他  
ありません。

私の友よ、貴方方は真理から耳  
をそむけることはできません。何  
となれば私共は心からまじめに、  
神は生き給うということと、また  
／＼天より語り給うたということ  
とすべて古えの予言者が予言した  
ように、あらゆる先の時代の神の  
子供達にかつて神が与え給うた万  
物をことごとく集め給うたこの神  
権時代にあつて主の御業を遂行す  
るよう召された私共に元通りの力  
があり、純粹なまゝである神の力  
と神権をまた／＼回復し給うたと  
いうことを宣言するからでありま  
す。

私共は、古えの使徒達が伝道し  
た時に万国の人々に与えた祝福と  
同じ祝福をすべての国民に与える

權威と権能とを有しているのであ  
ります。

ダニエルは「この王等の目に天  
の神一つの国を建てたまわん。こ  
れはいつまでも滅ぶることなから  
ん。この国は他の民に帰せずかえ  
つてこのもろ／＼の国を打破りて  
これを滅せん。これは立ちて永遠  
にいたらん」(ダニエル書二章四  
十四節)と告げています。

黙示者ヨハネはこの末日に於け  
る福音の回復についてすべての回  
復の予言の中で最も美しい予言  
の一つを私共に与えて居ります。  
即ちヨハネは「われまた他の御使  
の中空を飛ぶを見たり。かれは地  
に住むもの、即ちもろ／＼の国、  
族、言語、民に宣べ伝えんとて永  
遠の福音を携え、大声にて云う、  
「なんじら神を畏れ、神に栄光を  
歸せよ。その審判のときすでに至  
りたればなり。汝ら天と地と海と  
水の源泉とを造り給ひし者を拝せ  
よ」と云つて居ります。

これらの予言はすでに大部分成  
就致して居ります。福音はこの地  
上に回復されました。神はこの末  
の世に於て神の民に奉仕した世

界中の熱心に求める人々を真理と  
正義の道に導くようその権能を附  
与されている人々に引続き力を与  
え給うておいでになります。私共  
はいと嚴肅に、私共が神によりて  
召されているということと神の権  
能と權威によつて神の御言葉を全  
世界に宣べ伝えるのであるという  
ことを宣言するものであります。

私共は全人類の上に神の祝福があ  
るようにまた特にすべての人々の  
心が開かれ、正義にその望みが向  
けられ、そして真理が神の正當に  
任命し給うた僕たち即ち末日聖徒  
イエス・キリスト教会の宣教師に  
よつて示される時にその真理に耳  
を傾けると共に正しく理解するこ  
とができるよう切に祈つてやみま  
せん。

神が世の人々を祝福し給わんこ  
とを、また私共を祝福し給わんこ  
とを、更に宣教師の教えるところ  
に耳を傾けるすべての人々を祝福  
し給わんことを、私共は今日主イ  
エス・キリストの御名によりて謙  
遜に祈り奉るものであります。ア  
ーメン(千九百五十九年秋奉大会  
に於ける演説)

# 末日聖徒イエス・キリスト教会歴史粹

(五)

ジョセフ・フィールディング・スミス著

序論 古代および中世に於ける福音（つづき）

## 第三章 プロテスタント（新教徒）革命

六、新時代の夜明け。このような状態がいつまでもつづくことはできなかった。新時代の夜明けが万国の民の上に輝やき初めた。「主のみたま」が人々を励ましていたものから、再び確立された福音を末日にこの世へ伝えるためにいろいろの準備が始まった。そして完全な福音の光が輝やき出す前に人々がその自由意志の権利を行使するため、世人を完全に束縛していた迷信的恐怖と無智文盲の手かせ足かせをうち砕くことがぜひとも必要であった。印刷技術の進歩發達があったのみならずまた文芸と研究の復興があらゆる面に於て、またヨーロッパのあらゆる部分に於て現われた。これは一国や一民族に限られたものではなく

て全ヨーロッパが新しい生命を得た觀を呈した。望遠鏡の發明、重力の法則の發見、火藥の發明その他多くの驚嘆すべきことは人々の思想を根底から変えつつあった。

七、コロンブスの使命。海員用羅針器の發見によって航海者は一層大胆不敵となり、次第にその探検の度を進めて行つてついに希聖峰を廻つてインドへ行く航路を發見した。第十五世紀の終り近くには、地球は扁平であつてその表面だけ人が住んでいるとひろく信じられていた。當時知られてゐた陸地の向う側には、霧と暗黒のとばりが垂れてゐると世人は考へてゐた。また人の知つてゐる境界を越した向うは「暗黒の海」と言われてゐた。大洋のはるか向う側、または大洋の中には大きな龍が巢をくつてゐて、もし不幸にもその龍の住んでゐる中に漂流して行つた者は何人も二度と歸つて来ないと人々は信じてゐた。舟乗りたちは

陸地の見えるところより向うへ海を横切って行くことを恐れていた。この第十五世紀が終る少し前に、仲間の舟乗りたちよりもっと豪胆な航海者が一人現われてこの大海を越して向うへ行こうと申し出た。この冒険を決行する財産をもっている誰かの興味を惹こうとしてたびたび切な願いと企てとをくり返した後、この男はついに成功してこの驚ろくべき偉業が行われた。彼はこの偉業を完成するに当って、主が現わして見せたいとおぼし召す時節が到来するまで、深い智慧を以て昔からこの方東半球の国民に秘しかくしておいになった数々の発見をした。彼すなわちコロンブスは主の「みたま」に感じて大海を横切り、キリスト降誕以前五百年にアメリカ大陸に住んでいた一人の予言者の予言を成就したのである。

八、宗教改革。すべてこれらのことは個人的および宗教的自由を確立するために重要な役割を演じた。この大事業を為すに当ってすべての中で最も重要な力であったのは、疑いもなくいわゆる「宗教改革」であって、これは実際ローマ教会の束縛を脱する一種の革命であった。知識力のある偉大な人々が宗教界の奴隷の身分を覆えし始めた。方々の国ではほとんど時を同じくしてローマの支配権に対して反旗をひるがえした。イギリス、スカンジナビヤ、フランス、オランダおよびドイツの国々で多くの「改革者」たちが第十五世紀の終りと第十六世紀の初めに立ち上った。

た。これらの人々はいろいな程度の熱情と反対とを当時の教えに対して持っていた。最初これらの人々の唯一の望みはカトリック教会の中にあるいろいろの悪を正すことであったが、これに失敗するや彼らの多くは公然と反旗をひるがえして自分たち自身の教会を各々設立した。

九、マルチン・ルーテル。これら「改革者」中の最大の改革者はドイツのマルチン・ルーテルであった。ルーテルは法王の権力によって民の上にかけられた束縛のくびきを投げ捨てる働きをするに当って、誰よりも大きな仕事をした。多くの有力な王侯がルーテルを助けに来たが、当時ドイツにはヘンリー八世の支配下にあった英国や、グスタフ・ヴァサの統治していたスウェーデンにあったような人民の団結力または力の集中がなかった。従ってルーテルの仕事は困難な仕事であったが、ルーテルはそれを雄々しくも徹底的に遂行した。

十、準備事業としてのプロテスタント革命。しかしながら、これらの人々の使命はキリストの教会を樹立することではなかった。それは時がいまだ熟していなかったからであって、その重要な出来事は別の時代の人々が遂行するためにとって置かれた。これらの人々はその多事多端な時代の先駆者と呼ばれて、時満ちたる神権の時代を招き入れることができるよう世の人々を準備させるために大いに働いた。主はこれらの人々がその事業をするよう天を開くこ

とによってお召しにならなかった。また天使の訪れによって、あるいは直接の交通によって古えの時代に於けるようにお召しにならなかった。またこれらの人々の中、誰一人このようにして召しを受けたと主張した者もない。さりながら、宗教の名に於て行われた当時の憎むべき行いや慣習に反抗して戦うようこれらの人々の上に留って感動を与えたのは主の「みたま」であつた。少くともこれらの人々の中の大ていの者はこの通りであつた。英国々王ヘンリー八世の動機は利己的な動機であつたが、それでも主は宗教の自由のために、それから善いものを生じさせたもうた。最初ヘンリー八世はルーテルその他の人々の反抗に非常に激しく反対してローマ法王を擁護した文さえも書いたので、ヘンリー八世はこの働きに対して法王の祝禱と「信仰の擁護者」という称号を受けた。しかし後になって、自身の利益がカトリック教会の政策と衝突してどうしても勝つことができなくなった時、ヘンリー八世は反抗的となりその結果法王から破門を受けるに至つた。そこで防衛のために、ヘンリー八世は今日英国教会として知られている一つの独立教会を樹立して自分がその教会の頭首となつた。国会と人民とが王を後援したので、こうして英国の大国家教会が歴史にその姿を現わした。

十一、改革者間の不一致。とりわけ残念なことには、これらの「改革者」が彼らの宗教上の自由を確立したとき

彼ら同志は一致をすることができなかった。彼らはたえず混乱の状態にあつて教義の点に就いて互いに相争い、これがまた著しい嫌惡の情を抱かせてついに利害の衝突するいろいろ異つた宗派を樹立するようにならせた。さらに彼らは、彼らが受けなければならなかつたすべての迫害を通して、信教の自由を認める寛容が自由の基本原則であることを彼ら自身學んでいなかつた。この偉大な教訓を學んでいなかつたから、迫害を受けた者たちは多くの場合かえつて迫害する者となつた。そして彼らと意見を異にした者に就いて彼らが權力を有つた所では、敵が彼らに対して寛容でなかつたように彼らもまた寛容ではなかつた。

十二、自由の国アメリカ。それにもかかわらず、信教の自由を認める寛容の種子はすでに蒔かれていた。しかし、その種子の成長はゆるやかであつた。信教の自由を認める寛容は教育上の問題であつた。従つてそれは徐々に現われ、突然完全な成果を現わすことはできなかった。ヨーロッパでは多量の血が流され、また特にアメリカでは独立戦争中にもっと多量の血が流された後、人民は始めて完全にこの真理に目覚めたのである。それには、すべての国々の中で最も選り抜きの国の新しい土に種子を蒔く必要があつた。自由と宗教上の寛容は、このアメリカでわが偉大なる民主政体の基本となる部分となつた。わが国は苦しめられた人々、しいたげられた人々、また他の国々の圧迫を受

けた人々の避難する国となり、これらの人々は合衆国に安息の天国を見出した。それは、この国が流血によって自由に捧げられていたからである。

プロテスタント革命を指揮した偉大な人々を讃めたたえよ。これらの人々は、神の御子の再臨にそなえて十九世紀の前半に末日聖徒イエス・キリスト教会の設立を可能ならしめる援助をした。これらの人々の行ったあらゆる善事に対してわれわれは尊敬を捧げる。彼らは偉大な報いを受けるに相違ない。彼らは回復者ではなかったが、回復の使命と永遠の権能をもってその後に来るはずであった者のために道を備える目的で遣わされたのであった。

## 第二部 時満ちたる神権時代の開始

### 第四章 回復の必要

一、驚嘆すべき事業。プロテスタント革命の事業が完成し、宗教自由の種子を蒔くことによってアメリカの地に準備ができ、ここに福音の回復をする時が到来した。神の王国の福音が証のため全世界に宣べ伝えられるという主の約束が今や成就しようとしていた。またイエス・キリストの教会が間もなく再びこの世に設立されるはずであった。末日に出て来るべしとイザヤが予言した「不思議なる驚嘆すべき業」は俗界の賢人たちをあわて惑わすために今や世に現われようとしていた。

二、回復の期待は合理的であり聖書にかなっている。

主が審判のため来って「千年」の統治を始めたもう前に、主の道を備える一人の使者を遣わしたもうという信仰は、聖典にかなっているのはもちろんのことまた合理的でもある。福音を宣べ伝えることにより、義しきにならなれば警告を受け、悔改めと罪の赦しを受ける特権を与えられ、またキリストの教会の会員となる機会を与えられなくてはならない。

「それ主なる神はそのかくれたる事をその僕なる予言者に伝えずしては何事をも為したまわざるなり」(アモス書三〇七)とアモスは言った。

三、実現する古えの予言。古えの予言者たちは、天が開けて永遠の福音が主の再臨前に改めて人類に啓示されることをすでに語った。天の使者が訪れること、主の「みたま」が注がれてイスラエルの息子と娘たちが予言をし、老人たちが霊夢を見、若者たちが示現を見るところともまた末日の間に起る出来事として予言された。

×

×

×

×

×

×

# 心の師

仙台 小林 整 功

「主を畏るるは知識の本なり。愚なる者は知恵と訓誨とを軽んず」（しん言一ノ七）私たちは青年時代になると、真善美に対する感受性と知識の吸収力が盛んなときであり、自分を磨こうとする意力の強い人は自分の心の教師を見出す。ある人は身内の人、学校の先生、またその時代の知識人、作家、偉人さらに何年も何百年前に生きていたすぐれた人などを心の師として尊敬し、その生活、思想から多くのものを学びとろうとする。しかし精神的に成長するにしがたい、ある人たちはその師が自分に果たして合っていたかどうか疑う場合が生ずる。いままで自分が師としてきた人が果たしてこれからも心の師としてたよっていかれるかどうか、いろいろあろう。

先日私は久しぶりで友人に会った。彼は多くの青年がそうであるように心の師を持っていた。それはロマン・ロランであった。しかし彼は「自分はいま君と話をするための自分の思想をなにも持っていない」といった。自分は以前はロマン・ロランの思想に共鳴していたが、いまでは自分の心のささえになるものがない、まるっきり空白状態だ。というのであった。じっとしておれなくて学校の帰りはバーに寄り、電車の中では週刊誌を読んで不安をみたしているとのことであった。

私も心の師を以前から二人持っていた。一人は私に真善美のみかたと合理的生活の仕方を教えてくれた。もう一人は肉体的にも精神的にもすべての面にわたっての師である。前者はさておき、後者はイエスである。私は彼を師とすることにより、驚くほど多くのものを学んだ。将来も彼から真の生き方についてさらに深く学ぶことだろう。私はこの素晴らしい師をもつことができたことを天父に感謝している。最後に私はイエスを師とすることにより私たちは人生でもっとも大切なものを学ぶことができるとあかしする。

## 信仰と証詞

### 神権を受ける資格

「信仰と愛と事業への献身」

ジョン・エー・ウイヅソウ

神権を受けるには第一に「神を信ずる信仰」がなくてはならない。人は神をおそれることによって神権を受ける価値が生ずる。即ち神権の位に按手聖任される候補者たちは、天にましますわれらの父が真に生きていますこととその万物を覆いたもう御力を認めなくてはならない。

かれらは、全力をつくして神に服従するくらいに、神を愛することを学んでいなくてはならない。神をおそれることは神を愛することである。この愛はきわめて強いから人は神のみこころに反して服従しないことによって咎を犯すことをおそれる。

第二に、「愛」である。このもう一つの主な性質が、人をして神権をもって福音を施すに適うものとする。父なる神はその子供たちを愛して「救いの計画」をお立てになった。そして子供たちにこの世でいろいろ

## 親しく語らん

仙 台 中 西 昭 世

私は友人と望ましい人間像について話し合った。私たちは初めのうちはなんのさしさわりもないような一般的なことを話していたが、だんだん個人の問題にふれ、しまいにはお互いを批判し合うようになっていた。

お互いを高めるための批判は悪いとは思わないが、一步誤れば害になるものである。私のあることばに友は急に黙り、もはや口を開こうとしなかった。そのよそよそしい態度にくしみに似たいらだたしさをおぼえ、そのまま友と別れたが、自分をふりかえてみたとき、私は友の自尊心を傷つけてしまったことに気がついた。相手の欠点をつるしあげるつもりは全然なかったが、結果において大変相手に対して高飛車な態度をとっていたのである。しかし自分のいったことはけっして相手の自尊心を傷つけることを下心にしたものではなく、問題に対する私なりの解答であったので、結果においてどうあらうとも、私が一方的にあやまるのは気が進まなかった。

このようなとき私はアンドラス伝道部長のメッセージにより、主から助けを得た。その方法は「話し合い」ということである。

「うらみをいだいたり悪感情を持っていたりすることは、他のだれよりもこのような心持ちを持つている人に多くの害を与えます。私どものすべての誤解と不一致と悪感情を除くために、主のおきめになった行動、すなわちあなたがだれかに反対しているなら、その人のところへ行って二人きりで懇談するという行動をとるようにしなさい」と伝道部長は述べている。

話し合いによっていままでの感情のもつれがとけたときに、私たちは相手に対していままでより以上の親しみと信頼が生まれてくる。私はこの経験から話し合いの重要なことを知り、愛のことばはながく心にかがやくという賛美歌をかみしめてみた。

ろな経験をする特権を与え、人間が「としえのいのち」を得んがためにその独り子をして肉体の死に逢わせたもうた。

すでに「福音の計画」は愛に基いているから神権すなわち、全能の神の能力は自己を忘れた愛を示さなくてはならないものである。神権者が愛を示さないならば神権はその鋭い力を失ってしまう。

第三は、事業に献身することである。人をして神権を受けるにふさわしい者とする能力は、神の事業に身を献げるところから来る。「福音」をよく理解しなくてはならぬから神権を受ける候補者は聖典と「神の御言葉」をよく研究して、この教会の諸原則、諸儀式およびもろの組織に通じなくてはならない。またかれらは、「福音」という智識が人類の現世的事業とおよび霊的のことにいかに施されるかを学ばなくてはならない。とくに、かれらは「イエス・キリストの福音」といわれている働きに活潑に従事すべきで、この世の学問や、いわゆる大企業完成の能力は必ずしも必要ではない。

ニュースノ

## ゴルドン・B・ヒンクレー長老の

### 伝道視察の来日予定発表さる



十二使徒評議員会補助であり、伝道部委員  
会実行委員長であるゴルドン・B・ヒンクレ  
ー長老の極東訪問が突然に発表された。主に  
伝道事業を視察されるようであるが、会員と  
接する特別大会も沖繩、東京と京城の三ヶ所  
において行われる予定である。大会の日時と  
会場のくわしい事は伝道部長より各支部長を  
通じ通知されるが、下記の日時は仮のもの  
として伝道部長より発表されたものです。  
十二使徒評議員会補助、ゴルドン・B・ヒ  
ンクレー長老の北部極東伝道部訪問(仮)日程  
五月十九日(木) 台湾から飛行機で沖繩へ到  
着 午後七時 伝道部長とLDS軍人会  
員の指導者と会見して訓令  
五月二十日(金) 沖繩に於ける米軍幹部将校

と隊附牧師を訪問  
アメリカ領事館職員を訪問 教会の所有  
財産と購入予定の財産を視察  
午後七時 沖繩建築委員会と会見  
五月二十一日(土) 宣教師と共に布教活動  
午後七時 沖繩在住米軍の地方部大会に  
於ける神権会と扶助協会集會に出席  
五月二十二日(日) 午前九時 沖繩地方部大  
會に於ける神権会と扶助協会集會に出席  
午後七時 沖繩地方部大会の一般大会  
午後七時 沖繩在住米軍LDS会員の  
地方部大会の一般大会  
五月二十三日(月) 宣教師と証詞会および布  
教に關して話し合う會  
宣教師と個々に面接  
沖繩に於ける教会運営のため伝道部長と  
地方部長と共に会合  
五月二十四日(火) 飛行機にて東京へ出発  
五月二十五日(水) 伝道部に於ける教会運営  
のために伝道部長と会合  
午後七時 LDS軍人会員委員らと会合  
五月二十六日(木) 東京に於ける米国外使館  
員と会合  
日本在住米軍の幹部将校と隊附牧師を訪  
問  
五月二十七日(金) 東京―横浜地区に於ける  
教会の財産を視察  
午後七時 地方部及支部の指導者と会合

五月二十八日(土) 伝道部の運営を討議する  
ため伝道部長と会合  
午後七時 特別プログラムと余興  
五月二十九日(日) 午前十時特別大会の一般  
大会  
午後二時 特別大会の一般大会  
五月三十日(月) 宣教師と共に布教活動  
五月三十一日(火) 全日本宣教師大会出席の  
ため山中湖へ旅行  
各宣教師と個々に面接  
六月一日(水) 改宗者獲得方法を討議するた  
め日本在住の宣教師と会合  
午後七時 特別プログラムと余興  
六月二日(木) 日本在住宣教師の証詞会  
各宣教師と個々に面接  
六月三日(金) 飛行機で京城へ  
韓国在住の米軍幹部将校および隊附牧師  
を訪問  
六月四日(土) 宣教師と布教活動  
京城に於ける教会財産視察  
六月五日(日) 午前九時 韓国地方部大会に  
於ける神権会と扶助協会集會に出席  
午後十時半 韓国地方部大会の一般大会  
午後二時半 韓国在住米軍LDS会員の  
地方部大会  
午後七時 米―韓MIA大会  
六月六日(月) 宣教師と証詞会および布教に  
關して話し合う會  
各宣教師と個々に面接  
米国外使館員訪問  
六月七日(火) 飛行機にて釜山行、教会財産  
視察、京城へ帰る  
六月八日(水) 京城より東京へ  
六月九日(木) 米国へ向けて出発



伝道本部だより

バプテスマ

|       |     |       |      |
|-------|-----|-------|------|
| 畦地彦作  | 阿倍野 | 士田勝   | 新潟   |
| 泉谷巖   | 〃   | 小野武子  | 〃    |
| 盛永保   | 旭川  | 遠山京子  | 新潟   |
| 谷川功   | 〃   | 山口貞夫  | 〃    |
| 重岡政信  | 福岡  | 車秀徹   | 〃    |
| 吉沢ひろし | 〃   | 四枚田民子 | 小樽   |
| 出口よしえ | 広島  | 赤塚一彦  | 〃    |
| 佐藤房枝  | 甲府  | 服部元夫  | 仙台   |
| 河原地富雄 | 松本  | 吉田秀子  | 東京中央 |
| 松村幸利  | 〃   | 田口裕久  | 〃    |
| 宮城光子  | 〃   | 白木康子  | 〃    |
| 川上安子  | 〃   | 小林勝江  | 〃    |
| 林慶子   | 室蘭  | 八巻一恵  | 東京南  |
| 浅沼秀子  | 名古屋 | 荒木繁   | 〃    |
| 高橋貞子  | 〃   | 末永堅太郎 | 東京西  |
|       |     | 片山志奈子 | 〃    |

神権

○執事

|         |     |
|---------|-----|
| 新垣盛治    | 普天間 |
| 金城幸子    | 那覇  |
| 幸地貞子    | 〃   |
| 当銘孫吉    | 〃   |
| 宮城武美    | 〃   |
| 上地孝子    | 〃   |
| 伊差川新    | 〃   |
| 伊差川栄子   | 〃   |
| 〃洋子     | 〃   |
| 石川清文    | 〃   |
| 他に韓国十四名 |     |

○教師

|        |     |
|--------|-----|
| 岡田松雄   | 新潟  |
| 三浦タダオ  | 室蘭  |
| 松川守    | 新潟  |
| 小畑ユウイチ | 岡山  |
| 佐藤勝幸   | 札幌  |
| 小松文雄   | 〃   |
| 新垣淳市   | 普天間 |

○祭司

カノオ・ヨシカズ 岡山

松本 裏 〃

屋富祖 昭 那覇

○長老

丸山周兵 東京中央  
佐藤襄二 東京北  
他に韓国に祭司三名、教師十名、執事三名の任命があつた。

## 支部所在地

阿倍野 大阪市阿倍野区阪南町中一ノ三八  
旭川 旭川市八条五丁目  
福岡 福岡市菜院大通二ノ五五  
群馬 高崎市並榎町二七五  
広島 広島市古田町古江四〇〇ノ三  
金沢 金沢市成瀬町一ノ四 野田方  
甲府 甲府市富士見町一  
松本 松本市沢村一六〇四  
室蘭 室蘭市幸町八九  
名古屋 名古屋市中区和区北山町三ノ四一  
新潟 新潟市中大畑町五五七 金井方  
西ノ宮 兵庫県西ノ宮市田代町一一一  
岡町 大阪府豊中市岡町北二ノ一八  
岡山 岡山市国富一ノ一九 丹下方  
小樽 小樽市富岡町一ノ三五  
三ノ宮 神戸市灘区篠原本町四ノ三五  
札幌 札幌市北二条西二四丁目  
仙台 仙台市光禪寺通り二八  
東京中央 東京都渋谷区八幡通一ノ三四  
東京北 東京都豊島区椎名町四ノ二〇六八  
東京南 東京都大田区南千束町二四九  
東京西 東京都武蔵野市吉祥寺三六八  
山形 山形市諏訪町三九七  
柳井 山口県柳井市今市三九一  
横浜 横浜市中区磯原町二九  
普天間 沖縄宜野湾村野嵩区三二八  
那覇 沖縄那覇市松尾区一三九

## 編集後記

五月はアロン神権回復の月、新緑にかかる端午の節句の月、生気が溢れている月であります。この際十二使徒評議員会補助であつて教会の伝道部委員会実行委員長であるヒンクレー長老を迎えて教会も一段の進歩をすることと思います。

(佐藤竜)

五月一日、街頭のモーデーの騒ぎも知らぬ顔に、清く晴れ渡った、安息日の青空高く、ここ横浜支部の庭に、赤黒黄の色も鮮かな鯉幟がへんぽんと蹴ひるがえっている。神権者の卵、謙三君(鈴木支部長の御令息)のお祝いだ。最近教会で結ばれた若いモルモンの家庭が競争して〃地に満てよ〃の誠命を実行しているのは誠に喜ばしい限りだ。このアロン神権回復の意義ある月に、神権者増強十年、二十年計画のもとに続々と若い兄弟姉妹が良縁を結ばれるように心から希望する。又先輩野口兄弟に見習うて縁結びの神も大いに活躍してもらいたいものだ。先般群馬支部で系図委員の吉宗姉妹によつて系図教師の萩本兄弟と系図第一副会長の福沢姉妹が結ばれたのなどは系図に咲く花として誠にめでたいことだ。御両人のこれからのファミリー・グループ・シート作成も一段と熱をおびることであらう。会員諸氏よろしく鯉のぼりの勢を以てこの模範に従つて下さい。

(渡部)



5月号表紙一神権回復の図

月刊「聖徒の道」第四巻第五号

一九六〇年五月五日発行

実価 一ケ年 三百円

一部 三十円

編集兼  
発行人

ポール・C・アンドラス

発行所

東京都港区麻布広尾町十四

末日聖徒イエス・キリスト教会

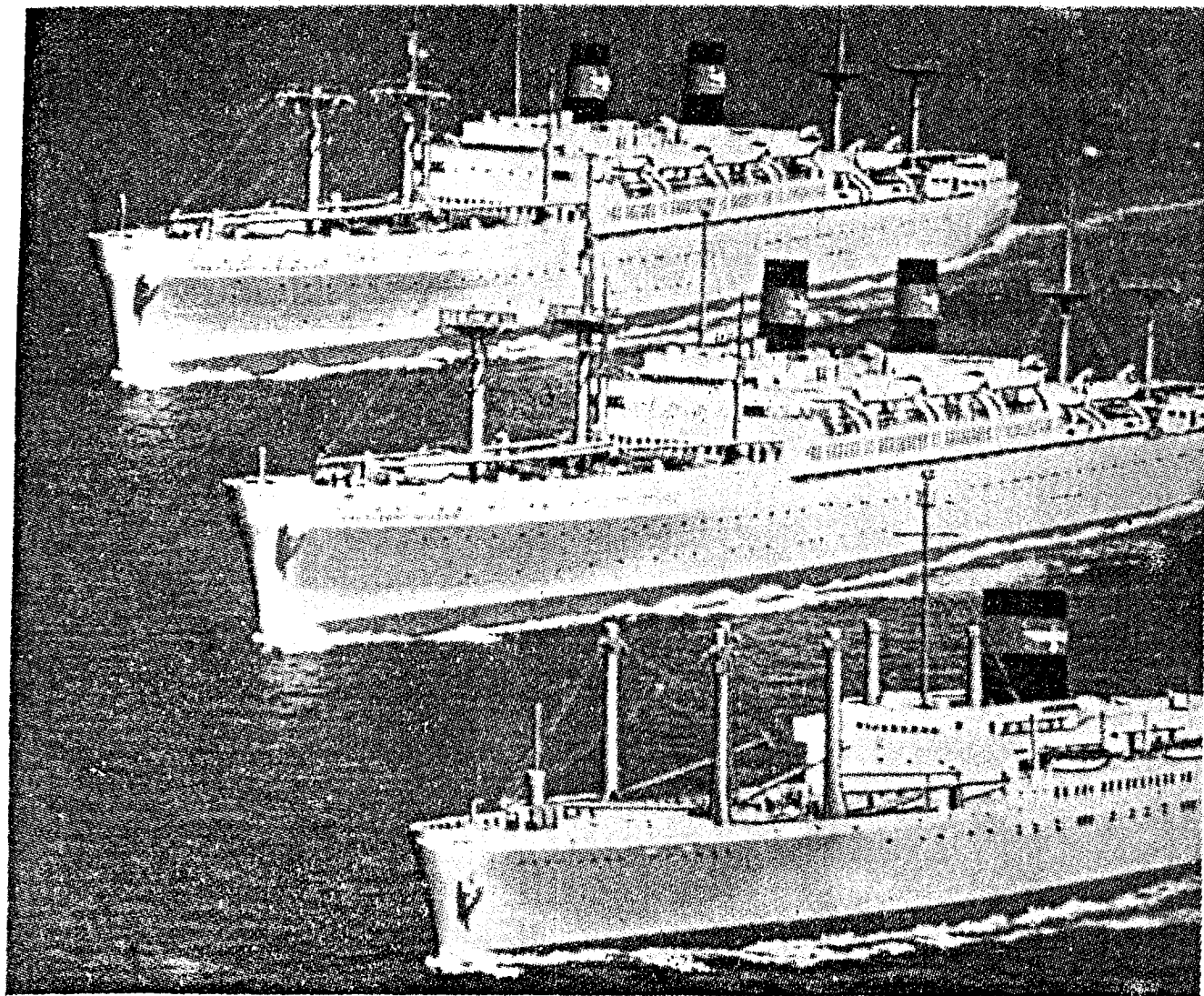
北部極東伝道部

# 内 案 書 図

|          |           |          |       |
|----------|-----------|----------|-------|
| 教義と聖約    | 高価なる真珠    | 上質革製合本…… | 一一〇〇円 |
| モルモン経    | 教義と聖約     | 合本……     | 三〇〇円  |
| 高価なる真珠   | モルモン経     | (新訳)……   | 二〇〇円  |
| モルモン経    | 信仰簡条の研究   | ……       | 三三〇円  |
| モルモンとは   | 完成への道     | ……       | 二〇〇円  |
| 初等協会教科書  | 総合聖句の手引   | ……       | 一五〇円  |
| 日本系図探究要覧 | 古代アメリカの生活 | ……       | 一〇〇円  |
| 旧約聖書物語   | 家督権の祝福    | ……       | 一〇〇円  |
| 扶助協会手引   |           | ……       | 五〇円   |

## 日曜学校用

|        |        |      |       |         |         |           |         |               |               |           |         |            |         |         |           |       |            |
|--------|--------|------|-------|---------|---------|-----------|---------|---------------|---------------|-----------|---------|------------|---------|---------|-----------|-------|------------|
| 宗教と生活Ⅱ | よきおとづれ | 聖書物語 | 福音の実践 | 聖典中の指導者 | M I A 用 | 役員と指導書の手引 | 我らは奉仕する | Mメン・グリーンナーの手引 | 演劇指導者基礎知識と脚本集 | 演説が上手になる法 | 社交ダンス必携 | 新しいフォークダンス | 讃美歌及び歌集 | 末日聖徒讃美歌 | 末日聖徒讃美歌拔萃 | 子等は歌う | レクリエーション歌集 |
| 一五〇円   | 一〇〇円   | 一五〇円 | 一五〇円  | 一五〇円    |         | 一〇〇円      | 一〇〇円    | 一〇〇円          | 七五円           | 一五〇円      | 一六〇円    | 五〇円        |         | 三〇〇円    | 三〇〇円      | 一〇〇円  | 四〇〇円       |



## アメリカ向定期に出帆する 豪華船プレジデント号

明日といわず、今すぐ桑港向け出帆の一等とエコノミイ・クラスの完備したプレジデント・ウイリソン号又は姉妹船クリブランド号又はプレジデント・フーパー号(一等のみ)に御乗船の予約を御申込み下さい。

豪華なプレジデント・スタイルで素晴らしい航海をお約束申し上げます。

御希望によって、海空連絡スケジュールを組むこともできます。早速弊社支店又は代理店にお問合せ下さい。



東京 (201) 6831-8 横浜 (8) 7541-5 神戸 (3) 5381-4 大阪 (23) 0260